

日本災害看護学会 令和6年能登半島地震災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日：2024年3月3日（日）

活動隊員：金谷雅代

1. 活動期間

2024年2月29日（木）17：40～ 3月2日（土）12：00

2. 活動場所

珠洲市立大谷小中学校（珠洲市大谷町1字78番地）

避難所使用者数 35人 19世帯（3月1日現在）

3. 石川県珠洲市の被害状況（石川県：3月1日 14時現在 石川県庁）

人的被害：死者 103人 うち災害関連死：6人 負傷者：重症47人、軽症202人

住家被害：建物全壊・半壊・一部損壊：9,442棟

4. 避難所の状況

【避難者数】

派遣期間中に1.5次、2次避難所からの完全帰還者はいなかった。

～派遣期間中の避難者数の推移～

2月29日（木）：35人

3月1日（金）：35人

3月2日（土）：35人

【避難所運営】

避難所管理者と地域ボランティアにより自主運営されている。外部支援者として千葉県からの行政職員が2名体制で常駐している。救護要員として日本災害看護学会所属看護師が交代制で常駐している。3人の消防職員が交代で常駐し、食事の際の支援も行っている。発熱者が発生し、隔離場所として校舎3階の教室を使用している。3月1日（金）朝にも発熱者が出たため、インフルエンザの出席停止日数に準じて5日間の隔離期間として、追加で教室を使用することになった。すでに隔離していた2世帯は、全員の健康状態を確認し、隔離期間が終了したため、3月1日に1世帯、3月2日に1世帯が体育館に移動した。3月12日に卒業式が実施されるため、体育館の前方部分を学校に返す準備として、レイアウトを検討し、少しずつ物品の移動（未使用の寝具類等）を開始した。退所が決定した人の寝具類は外し、集約箇所へ移動した。避難者の移動のためのスペースを確保したのち、掃除機で掃除を行った。空いた段ボールベッドの点検と入れ換えを行い、卒業式前の本格的な移動時

には、できる限り布団の移動だけで済むように段ボールベッドを配置した。また、今回の移動を機に、可能な限り男性用区域と女性用区域に分かれるように配置を検討した。現在は通路を挟んで、2列ずつの居住空間であるが、卒業式の際は、全体が半分の空間になるため、一時的に3列ずつ使用することとし、単身利用者のベッドは2列を交互配列になるようにして、一人あたりの間隔が確保されるようにレイアウトした。また、前日には避難指示が発出され、在宅避難者が避難所へ来ることも考えられたため、緊急避難者用のベッドも確保しておくことにした。具体的な移動は今後実施してもらうことを引き継いだ。

【避難所の生活状況】

上下水道の状況は変わらず、復旧していない。2日に1回自衛隊の給水が4t届くため、校舎内の一部トイレが水洗で使えるなど、有効に活用されている。

警察官の訪問や、外部支援者の訪問、新聞取材があり、リーダー等が対応されている。

日中はほとんどの人が仕事や自宅の片付けなどのために不在となり、避難所内の滞在者は少ない。避難所内滞り者も、天気を見ながら積極的に散歩に出かける様子も見受けられ、活動的に過ごしている。

天候不良で五右衛門風呂の使用はなかったが、シャワーの利用はあり、在宅者の利用もあった。

5. 支援活動の実際

【被災者への生活支援と健康支援】

定期的な健康観察として、降圧剤服用者の血圧測定やDVT予防策を講じている人の下肢の観察、弾性ストッキング着用状態の確認、引き継ぎを受けた処置を継続し、状況を確認した。また、清掃、消毒、換気などの環境調整を実施した。

発熱者が1家族内で2名発生した。学童のため、学校教員と児童の状態について共有した。発熱初期であり、検査の有効性は不透明なため、水分摂取を促し、様子観察することにした。軽快しない場合は、受診することも家族と話した。発熱者が発生した世帯は、体育館の1.5階で生活していたため、体育館1.5階で生活していた2世帯を校舎3階の別々の教室に移動した。1世帯4人のうち、2人が3月1日に39℃台を認めていたが、3月2日には38℃台となり、起きている時間も増えてきた。しかし、さらに1人が3月2日の昼に38℃台となった。3階教室に移動したもう1世帯の2人は、すでに解熱しているが、食事摂取量の回復は十分ではない状況であった。

6. 支援活動を通しての課題

- ・児童生徒には学校生活が再開されているため、健康状態について、学校側とも共有していく必要がある。
- ・避難者の外出も増え、外部からの人の出入りが増えると、感染の機会が増える。これまで

の疲労の蓄積に、自宅の片付けなどでの疲労が重なると健康を害することにもつながるため、引き続き健康管理の呼びかけと環境調整をしていく必要がある。

・JRAT チームの訪問があったが、継続観察対象該当者が不在で、状況を報告するにとどまった。医療支援関係者の訪問がある機会を有効に避難者に利用してもらえるようにしていく必要がある。

以上

<レイアウト案>

